

日本語聴解試験の傾向と実践的聴解授業指導への応用

(桂林理工大学日本語科教員・国際連携推進機構客員研究員) 曾 文 華
 (国際連携推進機構 国際教育支援センター) 高 橋 志 野

The Tendencies of Testing Listening Comprehension in Japanese Language Tests and How that Knowledge can be Applied in the Language Classroom

Wenhua ZENG and Shino TAKAHASHI

1 はじめに

野元 (2007) 他にあるように、中国の日系企業現場から「日本留学の経験がない日本語人材は、日本語能力試験 (以下 JLPT) 1 級を持っていても話せない」という声が多くある。また、組織に対する理解が不足し、商習慣の違いや、専門知識・技能といった日本のビジネス文化や知識が不足しているという問題も指摘されている。その原因は中国の大学での日本語学習が、実際の日本語の運用より、JLPTを始めとする日本語能力資格試験への合格を中心に行われていることが多く、そして、中国で最も重視されていた当時の JLPT が現場のニーズに対応していないことにあると思われる。

当時の JLPT は、野口他 (2009) によると、問題項目の個別要素的なテスト・分析的なテストと呼ばれ、文法・語彙など個々の知識について獲得した程度を重視し、コミュニケーションにおけるコンピタンスの現れであるパフォーマンスをあまり測定していないと言われていた。そのため、多くの学習者は、試験に合格できても、試験勉強中に学んだ日本語をどのような場面で使用できるかがわからず、具体的に運用することもできなかった。

これらの問題を改善するために、国際交流基金は、Morrow (1981) のコミュニカティブテスト理論を基盤に、2010年に JLPT の改定を行った。ここで、改定前の JLPT を旧 JLPT と呼び、改定後の JLPT を新 JLPT と呼ぶ。

新 JLPT で測定するポイントは、国際交流基金 (2009) にあるように、「文字・語彙・文法といった言語知識と、その言語知識を利用してコミュニケーション上の課題を遂行する能力を測る」こととされた。

改定前後の JLPT の最大の違いは新旧 JLPT の認定基準を比較して作られた表 1 から窺える。

表 1 最上レベルにおける新旧 JLPT 認定基準対照表

旧 JLPT 1 級	新 JLPT N1
高度の文法・漢字 (2000 字程度)・語彙 (10000 語程度) を習得し、社会生活をする上で必要な、総合的な日本語能力 (日本語を 900 時間程度学習したレベル)	幅広い場面で使われる日本語を理解することができる。 読む ・幅広い話題について書かれた新聞の論説、評論など、論理的にやや複雑な文章や抽象度の高い文章などを読んで、文章の構成や内容を理解することができる。 ・様々な話題の内容に深みのある読み物を読んで、話の流れや詳細な表現意図を理解することができる。 聞く ・幅広い場面において自然なスピードの、まとまりのある会話やニュース、講義を聞いて、話の流れや内容、登場人物の関係や内容の論理構成などを詳細に理解したり、要旨を把握したりすることができる。

(<http://www.jlpt.jp/about/pdf/comparison01.pdf> より抜粋)

前頁の表1にあるように、新JLPTでは、文法・語彙など個々の知識力より、それらの知識を用いて、各場面のタスクを遂行するためのコミュニケーション能力があるかどうかを測る。

本論では、JLPTの聴解問題を中心に、中国で認知度の高い日本語試験の聴解問題の分析を行い、コミュニケーション能力を測る背景の元、日本語試験の聴解問題での出題傾向をまとめる。更に、それらの出題傾向に基づいて、学習者のコミュニケーション力が高められる聴解授業の指導案を、著者の1人の所属大学でも使用され、中国で非常に一般的な聴解教材『楽しく聞こう I』(1992)を事例として提示する。

2 先行研究

コミュニケーション能力を測るためのコミュニケーション能力を測る背景の元、日本語試験の聴解問題での出題傾向をまとめる。更に、それらの出題傾向に基づいて、学習者のコミュニケーション力が高められる聴解授業の指導案を、著者の1人の所属大学でも使用され、中国で非常に一般的な聴解教材『楽しく聞こう I』(1992)を事例として提示する。

Morrow (1981) はコミュニケーション能力を測る背景の元、日本語試験の聴解問題での出題傾向をまとめる。更に、それらの出題傾向に基づいて、学習者のコミュニケーション力が高められる聴解授業の指導案を、著者の1人の所属大学でも使用され、中国で非常に一般的な聴解教材『楽しく聞こう I』(1992)を事例として提示する。

Morrow (1981) はコミュニケーション能力を測る背景の元、日本語試験の聴解問題での出題傾向をまとめる。更に、それらの出題傾向に基づいて、学習者のコミュニケーション力が高められる聴解授業の指導案を、著者の1人の所属大学でも使用され、中国で非常に一般的な聴解教材『楽しく聞こう I』(1992)を事例として提示する。

一方、国際交流基金 (2012) はCEFR Can-do^[1]を参照した『日本語能力試験Can-do自己評価調査レポート「最終報告」』で、「聞く」ための評価リストを挙げた。「身近で日常的话题が理解できる」、「店で商品の説明を聞いて、知りたいことがわかる」、「仕事や専門に関する問合せを聞いて、内容が理解できる」、「政治や経済などについてのテレビのニュースを見て、要点がわかる」など、聴解の内容を20の場面に分けて、聴解分野でできる日本

語力を測る尺度を学習者に与えた。

日本国内では、Weirのスキル理論と新JLPTのCan-do評価リストを用いて、日本語試験の聴解問題を分析する研究が数多く存在する。中居 (2003) はWeirのスキル理論から、日本留学試験 (聴解・聴読解) において、場面・状況ごとにどんな会話が展開され、どんなスキルが必要なのか整理した。中居はまた、旧JLPTと比べて、日本留学試験は学生の実生活で役立つ試験であると指摘した。楊 (2010) は、聴解テストを解くためのストラテジーを分析し、それらのストラテジーが旧JLPTにおける聴解問題の得点を解釈する上での有効な手掛かりになると述べた。ヤン (2012) は新JLPTのCan-doを分析し、Can-doには言語行動を容易に想像できる課題があるものの、記述が抽象的で、具体的な言語行為が考えにくい課題もあり、さらなる改善が必要であると指摘している。以上のように、日本での聴解試験とCan-doへの分析は、詳細なデータを元に行われている。けれども、その研究は試験そのものの分析が中心で、実際の教授法への結び付き、つまり、試験の授業での活用に関する内容が管見の限り見られなかった。

JLPTの改定及び日本語の聴解授業への影響についての研究は、中国国内でも盛んに行われている。例えば、李 (2011) は新JLPTの聴解問題のパターンを分析して、それに対応する回答方法を探ろうとした。しかし、李のような研究のほとんどは試験内容の紹介に留まり、試験についての深い分析が少ない。一方、馬 (2012) は改正後の聴解問題は難度が大幅に増加し、測定しているポイントは日本語の実践的な運用力に移ったと指摘した。また、新JLPTで問われている聴解能力を高めるために、聴解授業における授業方式の多様化・実生活場面の模擬化を提案したものの、具体的な指導案は示されていない。

以上の日本と中国における聴解問題についての研究を比較すると、日本では試験の内容に注目して、コミュニケーション能力を測る背景の元、日本語試験の聴解問題での出題傾向をまとめる。更に、それらの出題傾向に基づいて、学習者のコミュニケーション力が高められる聴解授業の指導案を、著者の1人の所属大学でも使用され、中国で非常に一般的な聴解教材『楽しく聞こう I』(1992)を事例として提示する。

コミュニケーション理論を元に、各試験の聴解問題に対して、詳細な分析を行うこととする。また、その結果を踏まえ、学習者のコミュニケーション力の向上をめざす指導案も考察する。

3 研究方法

3.1 分析データ

本稿では、新 JLPT・旧 JLPT・J. TEST 実用日本語検定（以下 J. TEST）・BJT ビジネス日本語能力テスト（以下 BJT）・日本語専攻試験（以下専攻試験）の5種類の試験を分析の対象とした。これらの日本語試験はいずれも中国で認知度の高いものである。特に新旧 JLPT は、中国国内でも日本語能力の指標として、最も権威のある試験とされ、日本語学科の学生にとっては1級またはN1合格が目標となることも多い。一方、J. TEST は、日本語検定協会が1991年から実施しているもので、2007年に中国政府認定試験として TOEIC と同様の認定を受けている。この J. TEST は総合テストとビジネステストの2種類があり、そのうち総合テストには A~D レベル（以下 J. A~D）と EF レベル（以下 J. EF）の2つのレベルがある。BJT は一定の日本語とビジネス知識を取得していることを前提とし、その上でその知識をどれだけビジネスコミュニケーションに運用できるかを測定する試験である。また、新旧 JLPT・J. TEST 同様、BJT も外国人が日本に入国するための「在留資格認定証明書」交付申請の際に、日本語能力の審査の参考として活用可能であ

る。また、以上の日本国内の機関が実施母体の4つの試験の他に、今回の分析には、中国の教育部大学外国語指導委員会が実施する専攻試験も含めた。

以下の表2は、今回分析の対象とした、各日本語試験聴解問題の過年度の問題及びサンプルテストを示している。

次節では、以上の日本語試験の聴解問題を対象にして、分野分析という方法で、聴解問題の測定傾向をまとめる。

3.2 分析方法

本稿では、コミュニケーション理論に基づいて、課題を遂行するために必要な能力を手掛かりにして、分析を行う。そのため、学習者の日本語能力を測定する課題を4つのカテゴリーに分け、カテゴリー毎に、各試験の聴解問題が測定している項目の下位分類を行い、聴解部分における出題傾向を掌握する。

まず、試験で測定されている課題を国際交流基金（2009）の分類を基に「社会」「ビジネス」「教育」の3つの「分野」に分類し、実際の試験で学習者の言語知識の有無だけ測定する問題を「言語知識」という分野にした。この「社会」「ビジネス」「言語知識」「教育」という4つの項目1次分類とし、それぞれの下位分類を2次分類と呼ぶことにする。

2次分類の枠組みとして、「社会」と「教育」については、国際交流基金（2012）にある「聞く」ための評価リストを参考とする。そしてリストに挙げられた日常生活

表2 今回の分析に用いた日本語試験

試験	仕組み	分析した試験内容
新 JLPT	N1	過去問6回分（2010~2012年）
	N2	過去問6回分（2010~2012年）
	N3	過去問5回分（2011年7月抜きの2010~2012年）
	N4	過去問2回分（2011年12月・2012年12月）
	N5	過去問2回分（2011年12月・2012年12月）
旧 JLPT	1級	過去問3回分（2005年・2009年7月・2009年12月）
	2級	過去問3回分（2005年・2009年7月・2009年12月）
	3級	過去問3回分（2005年・2006年・2007年）
	4級	過去問3回分（2005年・2006年・2007年）
J. TEST	J. EF	過去問3回分（第93回・第98回・第105回）
	J. A~D	過去問3回分（第98回・第102回・第105回）
	ビジネス J. TEST	過去問3回分（第3回・第5回・第6回）
専攻試験	専攻八級	過去問3回分（2004年・2005年・2006年）
	専攻四級	過去問3回分（2005年・2009年・2010年）
BJT	無	模擬テストとサンプルテスト
		『BJT ビジネス日本語能力テスト模試と対策第2版』
		『BJT ビジネス日本語能力テスト公式ガイド』
		『BJT ビジネス日本語能力テスト体験テストと解説』
		『BJT ビジネス日本語能力テスト聴解・聴読解実力養成問題集』

表3 試験問題の分析カテゴリー表

1次分類	社会	ビジネス	言語知識	教育
	生活日常会話2	ビジネス日常会話	1・2級文法(文法)	論文・レポートなど
	社会・科学知識	商品の開発・生産・紹介	生活上の難語(語彙)	実験・授業
	その他	宣伝・広告・販売策	敬語(文法)	交流会などの活動
	日本社会の常識	就職・転職	慣用句・故事成語(語彙)	アルバイト
	社会活動	取引先訪問・交渉・売上	日用品の名称(語彙)	施設・部門の紹介
	スポーツ・運動	会議・プレゼン	3・4級文法(文法)	試験
	旅行・天気	オフィス業務・社内行事・社内生活		
	家庭生活	研修・出張・昇進		
2次分類	形・姿・設計	その他		
	プレゼント・買物	経営理念・投資		
	問合せ	スケジュールの相談・変更		
	社会問題	経済背景		
	レストラン・ホテルなどで	クレーム・アフターサービス		
	芸能	ビジネス文書		
	約束の相談と変更			
	病気・見舞い			
	生活日常会話1			
	場所・交通			

表4 各試験の1次分類における問題数と割合

試験名	社会	教育	ビジネス	言語知識	合計
N1	<u>90</u> 42.7%	12 5.6%	73 34.6%	36 17.1%	211
N2	<u>89</u> 48.9%	16 8.8%	46 25.3%	31 17.0%	182
N3	<u>89</u> 64.0%	19 13.7%	23 16.5%	8 5.8%	139
N4	<u>41</u> 74.5%	10 18.2%	4 7.3%	0 0.0%	55
N5	<u>35</u> 83.3%	6 14.3%	1 2.4%	0 0.0%	42
1級	<u>73</u> 81.1%	6 6.7%	10 11.1%	1 1.1%	90
2級	<u>64</u> 80.0%	5 6.3%	11 13.7%	0 0.0%	80
3級	<u>62</u> 89.9%	1 1.4%	4 5.8%	2 2.9%	69
4級	<u>41</u> 80.4%	2 3.9%	1 2.0%	7 13.7%	51
J.EF	<u>67</u> 74.5%	1 1.1%	2 2.2%	20 22.2%	90
J.A~D	26 21.2%	3 2.4%	29 23.6%	<u>65</u> 52.8%	123
ビジネス J.TEST	4 3.3%	0 0.0%	<u>95</u> 77.2%	24 19.5%	123
BJT	15 6.5%	0 0.0%	<u>214</u> 92.6%	2 0.9%	231
専攻八級	<u>24</u> 80.0%	3 10.0%	3 10.0%	0 0.0%	30
専攻四級	<u>44</u> 73.3%	11 18.3%	5 8.4%	0 0.0%	60

注：1. 下線の数値は各試験の聴解問題で割合が一番高い項目である。

2. 「90 42.7%」の「90」の部分は問題数で、「42.7%」は分野毎の割合である。

活から学校生活まで20の項目をさらに具体化し、「社会」分野と「教育」分野の2次分類にする。「ビジネス」の2次分類は、加藤(2007)に詳細な分析があるため、その「テストが測る能力の領域」という図の「ビジネス・スキル」と「ビジネス知識」項目を活用した。「言語知識」では内容を語彙と文法に分けて、試験での測定するポイントに基づいて2次分類の項目を作った。具体的な2次分類項目は上の表3のようになっており、新JLPT N1の試験問題の出題量が多いものから順番に上から下に並べている。

次節では、以上のような2次分類を行ったあと、試験

別に各問題で測定している内容に基づいて、問題をそれぞれの入るべき2次分類の項目に当てはめる。そして、それらの2次分類の項目にあるデータに基づいて、各試験の聴解問題の測定している内容を分析し、聴解部分の全体的な特徴をまとめる。

4 出題分野から見た傾向

本節では、聴解問題で測定する項目を「社会」「ビジネス」「言語知識」「教育」の4つの分野に分けて、各試験の聴解問題の出題傾向をまとめる。まず、各試験の1次分類における各項目の割合は、上の表4のようにな

っている。

表4からは、まず、総合テストである4種類の試験、新 JLPT・旧 JLPT・J. TEST (J. A~D & J. EF)・専攻試験の全てで、社会分野の占める割合が一番高いことが伺える。逆に、ビジネス分野の専門テストである BJT とビジネス J. TEST は、当然のことながらビジネス場面の占める割合が一番高い。

上記の4種類の総合テストは社会分野の割合が高いといっても、試験によって、その割合は非常に異なる。例えば、どのレベルにおいても、社会分野がほぼ80%占めている旧 JLPT と比べると、新 JLPT はレベルが高ければ高くなるほど、社会分野が占める割合は低くなっていき、ビジネス分野の占める割合が高くなっていく傾向がある。特に N1 のビジネス場面の占める割合は34.6%に達し、社会場面に次ぐ2番目になっていて、すべての総合テストの中で一番高い。

4.1 社会分野の特徴

社会分野は日常生活のほとんどであり、学校とビジネスで行われる活動に必要な日本語能力の基盤を作って

いるため、聴解試験で測定の大部分を占めている。

以下の表5からわかるように、社会分野は総合テストにおいて一番大きな部分を占めている。特に旧 JLPT では、1級から4級まですべてのレベルにおいて、社会分野は80%を超えている。日常生活の交流が人々の暮らしの基本であるから、そうなるのは当たり前のことだと思われる。しかし、旧 JLPT の改定が行われた際に、社会分野の割合が大きく削減された。改定され、新 JLPT になってから、表5のN1からN5までの社会分野の割合に見られるように、レベルが高ければ高いほど、社会分野の占める割合は低くなるという傾向が見られる。日本語能力の高い学習者が社会分野のコミュニケーション力をすでに身につけているという前提で、新 JLPT のN1は作成されている。そのため、社会分野の問題数は削減され、ビジネス分野の問題数が増加するようになった。しかしながら、いくら削減されたとしても、社会分野はビジネス分野の日本語能力の土台になっているので、N1においてもまだ40%台を維持している。

試験の内容から見ても、新旧 JLPT の違いは大きい。旧 JLPT では、場所の説明、人の状態についての表現、

表5 各試験の社会分野における各項目の問題数の分布と割合

試験名	項目	社会分野																合計	割合		
		日常生活会話2	社会・科学知識	その他	日本社会の常識	社会活動	スポーツ・運動	旅行・天気	家庭生活	形・姿・設計	プレゼント・買物	問合寄せ	社会問題	レストラン・ホテルなどで	芸能	約束の相談と変更	病気・見舞い			日常生活会話1	場所・交通
N1		27	12	10	9	7	4	3	3	3	2	2	2	2	2	1	1	0	0	90	42.7%
N2		9	11	6	5	2	4	3	11	2	1	5	1	5	0	1	3	19	1	89	48.9%
N3		2	3	4	2	0	4	6	4	1	5	4	0	3	3	1	5	39	3	89	64.0%
N4		0	0	0	1	1	2	6	3	0	3	0	0	1	0	1	1	16	6	41	74.5%
N5		0	0	0	0	0	1	1	4	0	2	0	0	1	0	1	1	18	6	35	83.3%
1級		10	5	12	6	0	4	2	1	17	1	1	3	0	2	0	1	0	10	73	81.1%
2級		2	2	5	5	0	4	4	7	16	7	2	0	2	0	0	2	1	5	64	80.0%
3級		0	0	6	0	0	2	9	4	8	5	1	0	0	0	5	6	13	3	62	89.9%
4級		0	0	1	0	0	2	4	4	3	4	0	0	1	0	2	3	11	6	41	80.4%
J. EF		1	2	0	2	0	1	3	0	2	5	0	0	0	0	3	0	38	6	67	74.5%
J. A~D		4	3	0	7	0	1	2	0	0	1	0	0	0	0	1	1	5	1	26	21.2%
ビジネス J. TEST		1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	1	0	4	3.3%
BJT		0	1	1	5	0	0	0	0	0	2	0	0	2	0	0	0	0	4	15	6.5%
専攻八級		0	3	0	3	0	0	0	2	1	3	1	2	2	0	1	0	0	2	24	80.0%
専攻四級		0	3	1	16	1	0	2	3	0	4	0	0	2	0	1	0	0	4	44	73.3%

順番の説明についての問題が多く、場面も固定化されていて、各場面に使われている決まり文句と表現を測っているとされる。それらの表現を覚えておくだけで点数がとれる旧 JLPT と比べて、新 JLPT では、多方面にわたって、日本社会で生活する上での各課題を遂行するため、必要な日本語コミュニケーション力の有無をバランスよく測っている。その特徴は、どのレベルにおいても、日本人と交流する能力があるかどうかを測る「生活日常会話1」と「生活日常会話2」^[2]の占める高い割合から伺える。一言でいえば、新 JLPT の社会場面では、社会知識についてよりも、日本語を使ってどのように日本人とうまく交流するかを測定していると思われる。

4.2 ビジネス分野の特徴

各試験に出題されているビジネス分野の項目は、以下の表6のように14項目に分けられた。「オフィス業務・社内行事・社内生活」のようなビジネス分野の一般知識についての問題もあれば、「取引先訪問・交渉・売上」のような具体的なビジネス分野のタスクを遂行させる能力についての問題もある。また、「経済背景」のようなビジネスを行うために必要な背景知識についての問

題も出題されている。

表6から見られるように、すべての試験で、ビジネス分野の問題が出題されている。ビジネス関係の試験では、ビジネス分野日本語能力の測定が中心であるから、当然のことながら、割合は非常に高くなっている。特に、BJTでは92.6%にも達し、広範にわたって学習者のビジネスコミュニケーション力を測定している。総合テストの中でもレベルが高ければ高いほど、ビジネス分野を測定する問題が多くなる傾向を見せている。特に新 JLPT のN1では、34.6%に達し、総合テストの中で一番高い。

しかし、BJTと新 JLPT は試験問題に出題された項目で異なる点がある。新 JLPT では、ビジネス日常会話のやり取りに関する内容が多く、具体的なビジネスタスクの例を取り入れることがあまりない。例えば、ビジネス分野の中で、「ビジネス日常会話」と「商品の紹介」、「就職・転職」というビジネス知識全般の紹介は全体の3分の2まで占めていて、「ビジネス文書」や「取引先訪問・交渉・売上」などの具体的な取引の場面を問題に出さない傾向がある。一方、BJTのビジネス分野の特徴はビジネス文書の多さと、具体的なタスクの多さと、ビジネス専門用語の多さという3点である。例えば、「オフィス

表6 各試験のビジネス分野における各項目の問題数の分布と割合

試験名	項目	ビジネス日常会話	商品の開発・生産・紹介	宣伝・広告・販売策	就職・転職	取引先訪問・交渉・売上	会議・プレゼン	社内生活	オフィス業務・社内行事・研修・出張・昇進	そのほか	経営理念・投資	スケジュールの相談・変更	経済背景	クレーム・アフタサービス	ビジネス文書	合計	割合
N1		21	13	11	8	5	5	3	3	3	1	0	0	0	0	73	34.6%
N2		16	5	2	5	0	3	5	2	1	3	3	0	0	1	46	25.3%
N3		7	2	0	1	0	4	4	2	0	0	3	0	0	0	23	16.5%
N4		0	0	0	0	0	3	1	0	0	0	0	0	0	0	4	7.3%
N5		0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	2.4%
1級		1	0	0	2	2	0	2	0	0	1	0	1	0	1	10	11.1%
2級		1	3	0	1	1	0	4	0	0	0	0	1	0	0	11	13.7%
3級		0	0	0	0	0	3	1	0	0	0	0	0	0	0	4	5.8%
4級		1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2.0%
J.EF		0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2.2%
J.A~D		6	3	3	3	4	0	4	1	1	0	0	2	0	2	29	23.6%
ビジネス J. TEST		29	4	4	7	13	2	19	2	0	1	0	6	3	5	95	77.2%
BJT		11	9	19	4	26	4	62	6	9	10	11	2	7	34	214	92.6%
専攻八級		0	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	3	10.0%
専攻四級		0	1	0	1	0	0	2	0	0	1	0	0	0	0	5	8.4%

業務・社内行事・社内生活」という項目の中で、一般的な業務から、社内旅行や打ち上げまで、様々な場面で試験問題に取り入れられている。しかも、取引の交渉やプレゼンテーションなどの具体的なタスクのやり方も、比較的多く出題されている。特に実用的なのは、見積書をはじめとするたくさんのビジネス文書の実例を試験問題に取り入れていることで、それらの問題は学習者のビジネス文書の読解力と作成力を判定していると思われる。

4.3 言語知識分野の特徴

言語知識は言語学習の基礎であり、語彙・文法といった部分から構成されている。実際の試験で、音声内容の理解ができるかどうかというより、むしろ問題中の語彙や慣用句や文法などが既知かどうかを測定するものである。それらを以下の表7のように6項目に分けた。

表7から見られるように、同じ総合テストであっても、言語知識の出題される確率は相当異なっている。例えば専攻試験と新 JLPT の N4、N5 で言語分野は全く出題されていないのに対して、J. A~D では 52.8%も占めている。言語知識の測定は J. A~D の特徴の1つであると判断できる。また、新旧 JLPT を比較すると、旧 JLPT ではレベルが高ければ高いほど、測定している言語知識の問題が減っていくのに対して、新 JLPT では、ちょうど反対で、レベルが高ければ高いほど、測定している言語知識の問題が増える傾向がある。N4 と N5 の 0 に対して、N1 と N2 では 17%台に増加した。

問題の内容からみると、J. TEST で測定している言語知識は日常のコミュニケーションによく使われるものであると分かる。それらの問題で出題されている言語知識は日本人との接触経験が少ない学習者にとって馴染みがないが、日本人が日常生活の中でよく使っていて、使えば日本語らしくなるだけでなく、内容を簡潔に伝えることができるものばかりなのである。特に、言語知識分野の割合が一番高い J. A~D では、「単刀直入」といった故事成語、「てきぱき」などの擬態語、「火事場の馬鹿力」などの慣用句が数多く出題されている。さらに、試験には「A社との契約に漕ぎつけた」とようなビジネス表現も出題されているが、いずれの問題も、単に語彙と文法の意味を確認するだけでなく、実際の場面で行われている自然な日本語のやり取りを学習者が理解できるかどうかを測定している。

4.4 教育分野の特徴

教育分野は各授業の専門知識以外は、必要とされるコミュニケーション力が社会分野と重なるところが多いため、試験で比較の出題される確率が低い分野である。

次頁の表8からわかるように、ビジネス関係の BJT とビジネス J. TEST での出題は0になっている。総合テストの中で、一番高くなっている専攻試験四級においても、20%に達していない。特に、新 JLPT では、レベルが高ければ、教育に関する問題が減少する傾向がある。表8の新 JLPT 各レベルの合計では、N5 から N3 まで 10%台を維持しているのに対し、N2 では 8.8%、N1 では 5.6%

表7 各試験の言語知識分野における各項目の問題数の分布と割合

試験名	項目	1・2級文法	生活上の難語	敬語	慣用句・故事成語	3・4級文法	日用品の名称	合計	
N1		20	11	3	2	0	0	36	17.1%
N2		22	4	4	1	0	0	31	17.0%
N3		2	0	3	0	3	0	8	5.8%
N4		0	0	0	0	0	0	0	0.0%
N5		0	0	0	0	0	0	0	0.0%
1級		0	1	0	0	0	0	1	1.1%
2級		0	0	0	0	0	0	0	0.0%
3級		0	0	0	0	1	1	2	2.9%
4級		0	0	0	0	1	6	7	13.7%
J. EF		0	0	3	0	3	14	20	22.2%
J. A~D		9	23	4	13	3	13	65	52.8%
ビジネス J. TEST		0	14	1	7	0	2	24	19.5%
BJT		0	0	2	0	0	0	2	0.9%
専攻八級		0	0	0	0	0	0	0	0.0%
専攻四級		0	0	0	0	0	0	0	0.0%

表8 各試験の教育分野における各項目の問題数の分布と割合

試験名	項目	論文・レポートなど	実験・授業	交流会などの活動	アルバイト	試験	施設・部門の紹介	卒業	留学・入学	合計	
N1		7	3	1	1	0	0	0	0	12	5.6%
N2		4	4	5	1	1	1	0	0	16	8.8%
N3		3	1	8	0	2	0	1	4	19	13.7%
N4		1	3	0	3	0	1	2	0	10	18.2%
N5		0	4	0	0	1	1	0	0	6	14.3%
1級		3	1	1	0	0	0	0	1	6	6.7%
2級		2	0	0	0	1	1	0	1	5	6.3%
3級		0	0	0	0	1	0	0	0	1	1.4%
4級		0	0	0	1	1	0	0	0	2	3.9%
J.EF		0	0	0	0	0	0	0	1	1	1.1%
J.A~D		0	1	0	0	0	1	0	1	3	2.4%
ビジネスJ.TEST		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0%
BJT		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0%
専攻八級		0	0	0	0	1	2	0	0	3	10.0%
専攻四級		0	1	1	0	3	3	1	2	11	18.3%

に減少している。

試験の内容からみると、新 JLPT では、ある特定の授業の具体的な知識を除外して、学校における各活動や各施設・部門の紹介や論文・レポートの相談などを取り入れる傾向がある。つまり、学習者が学校生活に役立つ実用的な知識とコミュニケーション力を身につけているかどうかを測定している。

次節では、以上の分析を元に、実際の聴解授業で具体的な指導方法の提案を行う。

5 初級レベルにおける聴解授業での実践

尹 (2002) 等にあるように、中国の日本語教育の現場でも、「知識習得」から一変して、日本語の実践的な運用力を高めるための指導法に関する研究・実践が盛んになりつつある。とはいえ、中国の大学の日本語学科で日本語を教える際には、所属学生の 2 つのニーズ、新 JLPT N1 合格と卒業後の日系企業への就職を無視できない現実がある。そのため、中国の大学における日本語聴解授業では、今回分析の対象とした日本語試験の中でも、特に新 JLPT と BJT を視野に入れた、学生の日本語コミュニケーション力を高める授業を目的とすべきだろう。具体的には、初級レベルの段階から、ビジネス場面に必要な語彙や表現を少しずつ取り入れていこうと考えている。

筆者らが提唱する方法は、右の図 1 で示しているよう

に、場面や話し手と聞き手の関係が異なると、同一課題を遂行する時、異なる語彙・表現を「生活場面・砕けた言い方パターン」「生活場面・改まった言い方パターン」「ビジネス場面・改まった言い方パターン」に分けて、1 つの課題で同時に紹介することである。

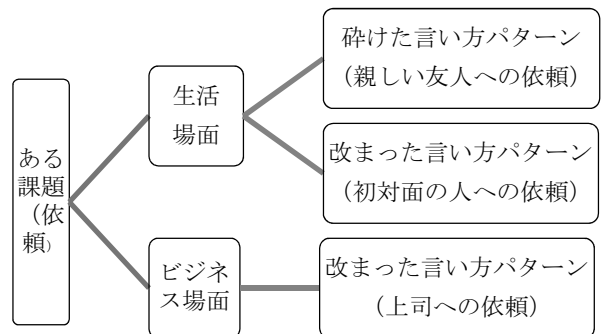


図 1 同一課題における 3 つのパターン

具体的な課題の決定は、初級日本語聴解教材である『楽しく聞こう I』に基づいて行う。『楽しく聞こう I』は筆者の 1 人の中国所属大学で使用されている教材であると同時に、絵が多く使用され、学習者の場面への理解を促すことができる。この教材の依頼・断りなどの生活場面の課題を整理したあと、新 JLPT・BJT からそれに対応するビジネス場面を選び、授業ではすべて提示する。このような形を取ることで、学習者は生活場面、ビジネス場面の日本語を同時に認識できると思われる。

5.1 ビジネス関連用品語彙の導入方法

ビジネス場面に使われている語彙力の増強はビジネス日本語を学習するための基本である。そのため、初級レベルの聴解授業で、生活場面とビジネス場面の日本語両方に重なる部分の語彙を意識的に増やして、学習者に接触させるチャンスを与えなければならない。初級で具体的に導入するのは日常生活の中でもよく使われている、文房具や電気製品に関するビジネス関連用品語彙である。

ビジネス関連用品語彙の導入は、前頁の図1に提示したように、生活場面とビジネス場面に分けて、同じ課題で2つの練習問題を用意することである。たとえば、存在表現を勉強する際、まず、『楽しく聞こうI』の第5課「どこにありますか」にある以下の図2のイラストを用いる。



図2 存在表現のイラスト

(『楽しく聞こうI』のp. 21より抜粋)

この設問は、図の中の□に当てはまる絵の番号を記入するという形式で行われる。以下の会話1はこの課題の音声原稿である。

会話1

- A: 確か、猫がいますね。
 B: ええ。
 A: 今日はいませんね。
 B: いいえ、いますよ。あなたの後ろに。

教材自体では、生活場面の改まった言い方のパターンを使用しているが、この存在表現の定着後、筆者らは応用問題として、場面をビジネス場面に変更した聴解問題を学習者に紹介する。例えば、事務室に事務用品が置かれている以下の図3のイラストを学習者に配布する。

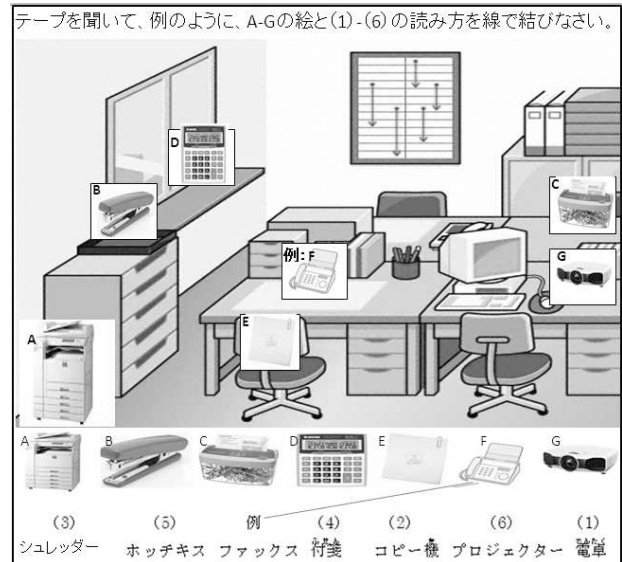


図3 存在表現の事務関係用品版

ただし、ここでは語彙は既知のものではないため、図2のような形式を取らず、音と具体的なものを結び付けるマッチング問題とする。図3の設問の音声原稿は以下の形である。

会話2

- A: すみません、ちょっと、ファックスを使いたいんですが……
 B: ファックスなら、ありますよ。左の机の上に。

学習者に聞かせる音声の中に、未習の語彙と表現が含まれているが、会話2の下線部の文法構造は会話1の下線部と同じである。そのため、学習者が生活場面で身に付けた文法を応用すれば、図3の問題でも正しい答えに到達できると考えられる。このように、将来ビジネス場面が必要となるものを初級レベルから音として入れることで、音と語彙が学習者の中である程度結びつけることができるだろう。

5.2 3つのパターンによる待遇表現の導入方法

ビジネス日本語には特別な文法が存在しているわけではない。しかし、場面や話し手と聞き手の関係が違ふとき、敬意の有無と親密度の異なりによって、表現が異なっている。そのため、前項5の図1で示したように、1つのタスクの中で、3つのパターンを提示して、ともに紹介することができると考えられる。ただし、「生活場面・砕けた言い方パターン」は教科書自体の聞き取りの中でよく出てくるので、本稿では、「ビジネス場面・改まった言い方パターン」を中心に、待遇表現の導入方法を検討する。

例えば、『楽しく聞こう I』の第9課「いろいろな規則」には、「～てください」という指示の表現を用いた聴解問題がある。そして、第9課の問題Iの1番で、次のような「生活場面・改まった言い方パターン」が使われている。

会話3

生活場面・改まった言い方パターン：

- A: すみません、このテープ、借りてもいいですか。
 B: ええ、どうぞ。そのノートに名前を書いてください。

この指示表現が定着したあとで、会話3のほかに、以下の会話4のような「生活場面・砕けた言い方パターン」と会話5のような「ビジネス場面・改まった言い方パターン」を入れて、日本語表現の多様性とビジネス場面の必要な待遇表現を紹介する。

会話4

生活場面・砕けた言い方パターン：

- A: ごめん、このテープ、借りていい？
 B: うん、いいよ。そのノートに名前書いて。

会話5

ビジネス場面・改まった言い方パターン：

- A: すみません、このテープ、お借りしたいんですが。
 B: かしこまりました。お客様、恐れ入りますが、こちらのノートにお名前をご記入くださいませ。

今まで中国で使用されている教科書の多くは、会話

3・会話4・会話5を一度に提示せず、生活場面の会話3・会話4を初級レベル、ビジネス場面の会話5を上級レベルの授業で教えていたのである。つまり同じタスクをレベルごとに分離して学習している。しかし、今回のように3つのパターンを同時に提示する方法を取れば、学習者は日本語の場面と聞き手による表現の多様性を容易にイメージ化できる。

具体的な聴解問題としては、会話3が学習者に定着後、以下の図4の応用問題1を配布し、会話3・会話4・会話5の音声データをすべて学習者に聞かせ、話者A・Bの関係を類推させる方法を取る。

テープを聞いて、各会話のAとBの関係を判断してから、
 下線のところに記号を書きなさい。

A AとBは親しい友人です。
 イ AとBはあまり親しくありません。
 ウ AとBはホテルのフロント係と宿泊客です。

(1) _____ (2) _____ (3) _____

*フロント係 酒店前台服务员
 宿泊客 住店的客人

図4 会話3の応用問題1

このような形で学習者にビジネス場面の表現と生活場面の表現が違っていることを気付かせる。もし、学習者がさらに理解力がある場合は、以下の図5のような穴埋め問題を配布して、学習者に会話5の音声をもう一度聞かせてから、聞き取れた音を記入させる。

テープを聞いて、()の中に聞き取れた音を書き入れなさい。

A: すみません、このテープ、お借りしたいんですが。
 B: () ました。
 () 客様、() が、
 () のノートに、
 () 名前を () 記入 () 。

図5 会話3の応用問題2

このような穴埋めの形で、初級段階で学習者は生活場面の表現を習得できると同時に、将来のビジネス上の改

まった表現にも触れることができる。そして、これらの表現の提示は、後の中上級の授業への間接的な導入となり、本格的なビジネス日本語を学習する際のソフトランニングになるのではないと思われる。

特に、ここで注意しておきたいのは最初に3つのパターンを提示する際は、学習者にすべて覚えることを強制してはいけないということである。ここでの目的は将来ビジネス場面では、会話3レベルの日本語と異なる会話5のような表現を用いるという現実に気付かせることである。

6 まとめと今後の課題

本稿では、コミュニケーションテスト理論を元に、分野分析という手法で、中国で認知度の高い各日本語試験の聴解問題を分析した。分析の結果、総合テストの聴解問題は依然、社会分野の問題の割合が高いものの、レベルが上がるにつれ、ビジネス分野の割合が高まることが分かった。特に、新 JLPT でビジネス場面の占める割合はレベルが上がるごとに、大幅に増加している。日本語教育の聴解指導の現場では、日本語のコミュニケーション力を高めることが必須であるが、これらの試験への対策を視野に入れる必要もある。ゆえに、本稿では、ビジネス場面の内容を初級レベルの聴解授業に取り入れ、1つの課題を「生活場面・砕けた言い方パターン」「生活場面・改まった言い方パターン」「ビジネス場面・改まった言い方パターン」の3つのパターンに分けて、紹介する聴解授業の指導案を提示した。

しかしながら、上記の指導案はまだ紙面にとどまる段階である。この具体的な効果は、今後の教育現場での検証に委ねられる。また、更なる課題として、今後の中日両国で実施される日本語試験の聴解問題を本稿で用いた枠組で分析を行い、そこで得られた知見を実際の日本語教育の現場と結び付けて、検討していきたい。

【註】

[1] CEFR は欧州評議会による「言語のためのヨーロッパ共通参照枠」の略称である。CEFR は欧州で共有されることを目指した言語教育・学習の汎言語的なフレームワークで、言語能力の熟達度を示す共通参照レベルと、6つの各レベルで「実際の言語使用場面で何ができるか

(Can-do)」を記述した493の例示的能力記述文(CEFR Can-do)を提供している。

[2] 「日常生活会話1」と「日常生活会話2」についての定義
1) 「日常生活会話1」は挨拶のやり取りなどの短い会話で、「即時応答」という聴解問題によく出る。具体例は以下のようである。

問題4 (以下すべて音声のみ)

問題4では絵などはありません。まず、文を聞いてください。それからその返事を聞いて、1から3の中から一番いいものを1つ選んでください。(略) 2番

女声：あつ、先輩、お久しぶりです。

男声： 1 きのはごちそうさま。

2 始めまして。どうぞよろしく。

3 あつ、元気だった？

(JLPT N4 2012年12月 問題4 2番より)

2) 「日常生活会話2」は社会分野の他の項目に入りにくい、ある程度まとまりのある会話である。内容は「日常生活会話1」より長くて、難しい。具体例は以下のようである。

3番 (以下すべて音声のみ)

男の人と女の人が話しています。女の人は、写真を撮ることの一番の魅力は何だと言っていますか？

男声：いいカメラ持ってるね、どんな写真撮るの？

女声：何でも、風景でも、人物でも、気になる物は何でも。

自分の作った料理や、町の看板なんかも、なかなか面白い写真になるよ、出来上がった写真は、インターネットで沢山の人の見ってもらえるようにしてるんだ。

男声：えー、カメラの楽しさって、いろいろな瞬間を後に残せるってことなのかな。

(以下略)

(JLPT N1 2011年7月 問題2 3番より抜粋)

【引用・参考文献】

尹松 (2002) 「パターン学習は理解を促進させるかーラジオニュースの聴解の場合ー」『日本語教育』112号, pp. 35-44

加藤清方 (2007) 『BJT ビジネス日本語能力テスト公式ガイド』日本貿易振興機構

加藤清方 (2009) 『BJT ビジネス日本語能力テスト体験テストと解説』日本貿易振興機構

- 金庭久美子 (2004) 「リソースの活用を目指した授業ー
 ニュース教材を利用した聴解授業ー」 『日本語教育』
 121号, pp. 86-95
- 国際交流基金 (2008) 『聞くことを教える』ひつじ書房
- 国際交流基金 (2009) 『新しい「日本語能力試験」ガイ
 ドブック』
<http://www.jlpt.jp/reference/pdf/guidebook1.pdf>
- 国際交流基金 (2011) 『2011年第1回日本語能力試験結
 果の概要』
http://www.jlpt.jp/statistics/pdf/2012_1_9.pdf
- 国際交流基金 (2012) 『日本語能力試験 Can-do 自己評価
 調査レポート<<最終報告>>』
http://www.jlpt.jp/about/pdf/cds_final_report.pdf
- 小林ミナ (2009) 『コミュニケーションのための教育文法
 に基づく日本語教材作成のための基礎的研究』平成
 17年度～平成20年度科学研究費補助金(課題番号
 17320075)
- 島田めぐみ (2006) 「日本語聴解テストにおいて難易度
 に影響を与える要因」 『日本語教育』129号, pp. 1-10
- 菅井英明 (2006) 「測定可能な言語能力とは」 国立国語
 研究所編 『世界の言語テスト』, pp. 3-14 くろしお
 出版
- 瀬川由美・北村貞幸・植松真由美 (2007) 『BJT ビジネ
 ス日本語能力テスト聴解・聴読解実力養成問題集』ス
 リーエーネットワーク
- JAL アカデミー (2006) 『BJT ビジネス日本語能力テスト
 模試と対策第2版』大連理工大学出版社
- J. TEST 実用日本語検定ホームページ <http://j-test.jp/>
- 中居順子 (2003) 「日本留学試験(聴解・聴読解)にお
 ける課題達成能力の分析ーコミュニケーション指導
 への第一歩としてー」 『東京経営短期大学紀要』第
 11巻, pp. 257-268
- 日本語能力試験ホームページ
<http://www.jlpt.jp/index.html>
- 野口裕之・倉元直樹 (2009) 「外国語としての日本語能
 力測定を支えるテスト理論」 『Journal of Quality
 Education』Vol. 02, pp. 94-118
- 野元千寿子 (2007) 「日系企業が現地社員に求める「ビ
 ジネス日本語」の実態」 『ポリグロシア』第13巻,
 pp. 69-81
- 文化外国語専門学校編 (1992) 『楽しく聞こう I』凡人
 社
- BJT ビジネス日本語能力テストホームページ
<http://www.kanken.or.jp/bjt/>
- 三國純子・小森和子・近藤安月子 (2005) 「聴解におけ
 る語彙知識の量的側面が内容理解に及ぼす影響ー読
 解との比較からー」 『日本語教育』125号, pp. 76-85
- 山本富美子 (1993) 「上級聴解力を支える下位知識の分
 析ーその階層化構造についてー」 『日本語教育』82
 号, pp. 34-46
- ヤン・ジョンヨン (2012) 「「～ができる」とは何かー
 日本語能力試験の「Can-do」自己評価からー」 『地域
 政策研究(高崎経済大学地域政策学会)』第14巻(4),
 pp. 34-44
- 楊元 (2010) 「聴解テストにおける問題解答に見られる
 ストラテジー」 『日本語教育方法研究会誌』vol. 17(1),
 pp. 72-73
- 劉東 (2010) 「総合日本語力を高める「聴解教材」分析ー
 初級レベルを中心に」 『三重大学国際交流センター紀
 要』05号, pp. 127-137
- Morrow, K. (1981) *Communicative language testing : Revolution or
 evolution. In the British Council. (1981) Issues in language testing.
 ELT Documents, Vol. 111*
- Richards, J.C. (1983) *Listening comprehension: Approach,
 design, procedure. TESOL Quarterly, 17(2), pp. 219-240*
- Weir, C. J. (1993) *Understanding and developing language
 tests. NY: Prentice-Hall*
- 李琨 (2011) 「浅析新日语能力一级考试听力改革要点及
 应考方法」 『吉林广播电视大学学报』05期, pp. 42-44
 (李琨 (2011) 「日本語能力試験1級の聴解問題にお
 ける改定の要点及び試験対策についての研究」 『吉林
 广播电视大学学报』05号, pp. 42-44)
- 馬晶 (2012) 「国际日语能力考试改革后的听力教学策略
 研究」 『语文学刊(外语教育教学)』07期, pp. 116-118
 (馬晶 (2012) 「日本語能力試験改定後の聴解授業に
 おける方策研究」 『語文学刊(外語教育学)』07号,
 pp. 116-118)
- 于治红 (2012) 「新日本語能力测试下的日语听力教学与
 对策」 『商业文化(上半月)』05期, pp. 57-58 (于
 治红 (2012) 「新日本語能力試験を元に考えた日本語
 聴解授業の対策」 『商業文化(上半月)』05号, pp. 57-58)